

ベトナム赤十字社本社訪問ならびタンホア市での贈呈式 報告

## “ベトナムへの贈呈台数が 10 年間で累計 1,000 台を超えました”

2016 年 12 月 19 日－23 日 秋子孝男 記

私たちの活動では大きな力となってくれているベトナム出身のメンバー皆さんですが、今回の贈呈式で彼らの母国への累計台数は 1,000 台を超えることができました。小田理事とともにベトナム社会主義共和国（以下ベトナム）赤十字協会本社総裁への訪問、贈呈式、障害者団体との交流などを行ってきましたので以下報告します。この事業は外務省 NGO 連携無償資金を得て、2017 年にかけて 340 台相当を送る活動の一環として実施したものです。



ハノイとタンホア（車で 3 時間）の位置



右から Ha 部長、Nguyen Ha 部長、Mai 主任。ボランティアで通訳同行のファンさん真剣に説明画面を理解してくれた



12 月 22 日のタンホア市における贈呈式を前に、21 日にベトナム赤十字協会の総本社を訪問しました。同協会は本年 2016 年に設立 70 周年を迎え、現在のベトナム国とほぼ同じ歴史をもっています。最新の記念冊子によれば全国で 1 万 5 千人を超すスタッフをもち 63 の特別市、省支部をはじめ草の根活動レベルでは 16 千以上の活動ユニットをもつ大きな組織です。同協会は枯れ葉剤被害者救済のための Agent Orange Victims Fund の上部団体の性格もあつたのですが、財団は徐々に独立運営化されていくようです。

当会は 2006 年に初めてベトナムに子供用車椅子を届けましたが、その後 10 年にわたる現地窓口のほとんどを赤十字協会に担っていただいています。70 周年を迎えるにあたり新総裁 PhD. Nguyen Thi Xuan Thu さん（女性）が着任されていきました。当会との窓口である国際協力推進部のこちらも新任責任者 Ms. Pham Thi Ha Chien さん、社会福祉局で Agent Orange Victims Fund 活動にも関わる Ms. Nguyen Thi Thu Ha さんの両名を中心に貴重な時間を割いていただきました。

翌日のタンホア市での贈呈式に新総裁が出席できぬ突発変更もあり、2 時間近くお二人に当会の活動全般、とくにベトナムとの深い関係、活動を通して解ってきた課題などを率直に説明し、当会の希望する報告に沿った協力を惜しまないとの励ましと深い感謝の言葉をいただきました。

12月21日午後は贈呈式会場のタンホア省へ。

ハノイから南方へ140kmのタンホア市、ベトナム戦争時は南への補給線の要所といわれ、戦争初期1965年から激しい空爆を受け続けたタンホア橋が近郊ソンマ河にあります。近年は海岸地域の保養地化、海底油田利用の工業基地建設もあり、大半は高速道路を利用する移動でした。

12月22日 赤十字協会タンホア省支部を会場に15名の障害児と保護者、赤十字社を代表して Mr.Quang Vink 副事務総長、省人民委員会代表ハティフォン女史、省赤十字協会会長 Trinh Thi Tiep,さんほか報道陣など70名近くの参加者とともに贈呈式を行ないました。タンホア省には今回贈呈の170台のうち60台、ゲアン省に残り110台が贈られたことになります。



公式会場にはホーチミンさんの胸像



主だった来賓



“車椅子を家族の一員と思い大切にしてください”



70周年への森田会長お祝いメッセージ

12月22日 贈呈式の後にはタンホア市郊外の農村地域へ車椅子の個別贈呈を兼ねて家庭訪問を行いました。国の体制がなすものか農村部での長大な灌漑用水路はじめ、簡易舗装整備済みの村道など、タンホア市周辺は社会インフラが裾野広く整ってきていると感じました。訪問した家庭もコンクリ造りで周辺道路もしっかりしており、お届けした車椅子が活躍できる機会は大きそうです。



フェム君 14 歳、同じ制服を着ているのは親友レイ君。車椅子ポケットにきれいなレインコートも入っていた。レイ君はチルト、ブレーキなど基本操作を真剣に聞いてくれた。きっと学校でもサポートしてくれることだろう



ドアンちゃん 5 歳。明るく気丈なお母さんは二人目のお子さんを身ごもっていた。赤十字支部会長と話し込むうちに涙が溢れ、涙目のまま感謝の言葉で送ってくれた。



赤十字協会とのスケジュールに先立つ 12 月 20 日、障害者支援グループ (Will to Live Center) 代表の Ms. Hien Nguyen さんを訪ねました。居住用アパートを IT トレーニングセンターとして活用しながら、WEB デザイン、商業写真加工処理など障害者の経済的自立を具体的に歩みだしているグループでした。トレーニング受講者は就学児童から青年期まで広く、ろうあ者、小人症の人たちもいますが Hien さん自身を初め、車椅子使用者、役立つと思われる人も多いようです。Hien さんは自らを回想しながら体に合わない成人用車椅子を幼児期に使ったことが筋肉、骨などの発育に悪影響を残したことを認識しており、当会の活動説明や子供用の各種車椅子写真を真剣に見て、その意図するところ、また難しさを障害者ゆえ、いろいろな障害者と共に活動しているがゆえ、しっかり理解してくれたと感じました。

車椅子贈呈の受け入れ団体としては、無償輸入が可能な団体であることほか、まとまった台数を障害児に届け、それを管理していただくことなどの“重さ”も説明し、メンバー

として所属する民間支援全国組織などと可能性を検討してもらうこととしました。



車椅子の Ms. Hien 代表。 当会の活動の有用性を高く評価してくれた。

ベトナムにおける障害者、障害児の背景には他国にはない Agent Orange (ダイオキシン類を大量に含む枯れ葉剤) があります。ベトナム戦争終結の 1975 年 4 月から 6 年後に結合双生児として誕生されたドクさんも 35 歳になられるそうです。枯れ葉剤の影響は 3 世代、4 世代を経ても残るケースがあるといわれますが、枯れ葉剤理由と判断される率、出生数は激減しているのも事実のようです。枯れ葉剤影響外の交通障害児、身体障害児には、公的な障害者支援機会が少ないことが話題に上がっていました。

ベトナムには今後とも車椅子を送り続けますが、公的な赤十字協会や他の公的団体を通し、子供用車椅子を必要とする障害児により近い立場の団体と交流が可能となることを願った所でした。

以上